

審査の結果の要旨

氏名 宮部浩幸

論文題目 ポルトガルの建築における修復・改修デザインに関する研究
-ポウサーダに見る再生手法と理念-

この論文は、歴史的建造物を転用したポルトガルのポウサーダをとりあげ、その修復・改修デザインの理念と方法を明らかにするとともに、歴史的建造物を活用するデザインにおける基本的かつ応用可能な知見を得ることを目的としている。

本論文は、五つの章で構成される。

第1章では、研究の目的や背景、研究方法、論文の構成について説明している。

持続可能な環境づくりが急務である今日、歴史的建造物の修復・改修の理念や方法を豊富化することが重要なデザイン上の課題であること、ポルトガルにおけるポウサーダの建築には歴史性と現代性の独特な融合形態が見られること、ポウサーダに関する既往の研究がその特質を理解するには不十分であることなどを確認した上で、研究の目的として、1) 視覚的現象に基づきポウサーダの特徴的なデザイン手法を明らかにすること、2) その手法をポルトガルの修復・改修の歴史の中で位置づけること、3) 増・改修における平面形式の変容の法則を明らかにすること、4) 視覚的現象と平面形式の関係を明らかにすること、5) 再生デザインの枠組みでポウサーダの独自性を評価すること、の五つがあげられる。研究の手順として、関連資料の収集・整理と現地調査、修復・改修の歴史的概観と分析視点の検討を経て、対象の具体的な分析へと進むことが示され、分析の方法として対象の視覚的現象における新旧区分、平面形式の変容過程を考察することの意味が述べられる。

第2章では、ポルトガルにおける歴史的建造物の修復・改修の歴史を概観し、デザイン上の課題の変遷が説明される。19世紀以来、視覚的現象として新旧を同化する、あるいは区別することが大きな課題となってきたこと、1980年代以降、いずれとも判断できないような曖昧な事例が現れてきたことを確認し、ポウサーダを分析する基本的な視点が、新旧の同化と区別、すなわち「想像に任せた修復」と「新旧を区別する改修」の狭間にあることが示される。

第3章では、20例の分析対象をとりあげ、その平面形式の変容過程が検討され、「修道院モデル」

と「城塞モデル」の二つの型に分かれることが明らかにされる。前者は修道院を起源とするもので、中庭のある平面形式が周辺部で成長するもの、後者は中世の城郭を起源とし、増築は限定的で概形と外部空間にはほとんど変化がない型であることが確認される。

第4章では、新旧を区分する視覚的現象について記述・分析され、「想像に任せた修復」では新旧区分が実際と一致しないこと、「新旧を区別する改修」では一致することが説明されるとともに、建築の概形では実際の新旧区分と一致せず、細部の意匠では一致する「新旧を織り込む改修」が存在することが説明される。また、こうした第三の方法というべきものは、対照的な他の二つのデザイン方法の葛藤の中で生まれたという歴史的解釈が示される一方、記憶が介在するなどして新旧区分の認識が遅延する知覚・認識上の特徴が見られることが指摘される。

第5章では、前章までの分析を踏まえ、結論としての考察が示される。まず「新旧を織り込む改修」における平面形式の変遷と視覚的現象に見られた特徴の関係が検討される。これを含めすべての分析を概観し、ポウサーダのデザインには「新旧を織り込む改修」という独自の方法が存在すること、その特徴として 1) 「新旧を織り込む改修」では真実の区分を含む複数の新旧区分がある、2) 「新旧を織り込む改修」は「想像に任せた」と「新旧を区別する」の二つの修復・改修方法の葛藤の結果生み出された、3) 「新旧を織り込む改修」には新旧区分の認識を遅らせる「概形に同化、細部に区別」が存在する、4) 機能、意匠の変更に無関係な安定した平面形式上の型がある、5) 平面形式、視覚的現象ともに過去の型や手法の特徴を保持しながら新しい条件に対応する、の五つが再確認される。

最後にこれらを総括し、「新旧を織り込む改修」が、歴史的建造物修復・改修におけるポルトガルの後進性が背景となり生まれたこと、それが「一瞥」と「凝視」という知覚における新旧認識の複数性の上に成立し、現在主流となっている新旧「同化」か「区別」かの二者択一的なデザインの理念や方法を拡大する可能性を示すものであるとされる。

以上のように、本論文は、これまで明確にされていなかったポルトガルにおける歴史的建造物の修復・改修デザインの独自性を綿密な調査と実証的な分析に基づき解明するとともに、修復・改修分野のデザイン手法と理念に新しい展開をもたらしうる基本的な知見を示し、建築デザイン論研究の分野に大きな寄与をなしたものである。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。